

会報

善哉

令和5年4月1日 第56号

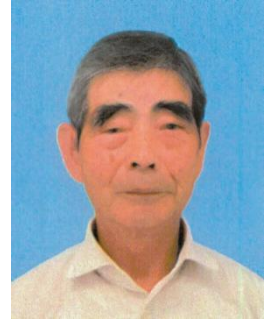


令和4年8月19日に秦野市重要文化財に指定された
金剛寺（東田原）木造阿弥陀三尊立像

NPO 法人 秦野歴史おこしの会

巻 頭 言

大日堂の歴史は凄い



秦野ぶらり会

会長 石川 邦夫

は神護景雲二年（七六八）二月相模宿禰の姓を賜り相模の国造となった、天皇家の人へと出世した。これは良弁が深く関係している証拠と言える。

良弁と聖武天皇の関係 この点に触れた書

物は無い、森本公誠著「東大寺のなりたち」を参考に組み立てを行った、首皇子（聖武天皇）は七歳の時、父の文武天皇が亡くなった

以後は元明・元正の女帝で育てられた。藤原氏の支えが唯一、成人をして妻がありながら藤原不比等と橘三千代の間に産まれた光明子を入内させた（霊龜二年（七一一））。子供

が出来たのは十一年後の神龜四年（七二七）で誕生して一ヶ月して基皇子として立太子した。しかし、翌年の誕生日を前に病没した。

この墓守の僧の中に良弁が居た。年齢四十歳と計算出来るので最年長、責任者だったし聖武天皇から見れば父親とも思える。度重ねる

墓参で懇意度も深くなっていたと考えられる。長屋王の事件も落着、天平と改元、そして天平三年（七三一）行基と和解、菩薩の

称号を下賜した。これも良弁の入れ知恵であろう。こうしたことから大仏像の造立へ行基菩薩の集団と共に走り出した。こんなことも

あったか、天平五年（七三四）聖武天皇は良弁の為に絹索観音像と寺院を建立した。現在の東大寺三月堂（法華堂）である。神奈川県史

巻一・NO-108 僧綱補任抄出には聖武天皇御師とある。良弁が開いた阿夫利神社に別当寺

を聖武天皇勅願寺として公費をもつて造立したのが覚王山安明院国分寺だ。当時は観音菩薩信仰（聖観音像）が中心であった。基皇太子の病氣平癒を願い百十七体の観音菩薩像が造られ、全国に配られた記録があるが、翌年に死亡しているので、途中で中止になった可能性もあるが、相模国は早く対応したとも考えられる。像長二百二十八cmの巨大な聖観音立像は奈良、京都、近江にも無い。

大山は一年中（春夏秋冬）太陽神の集う所 大山（千二百五十二M）に阿夫利神社が置かれて、その麓の遙拝所（大日堂）に聖武天皇勅願寺・神宮寺が建立され、相模国の繁栄の礎が図られた。そして、春分・秋分・夏至・冬至の太陽神を山頂に呼び込む事である。春分・秋分の日の入点は海老名・国分寺（平城京遷都時は大安寺領）、夏至の日の入りは寒川神社を創建して対応した。なお寒川神社は春分・秋分のダイヤモンド富士である。冬至の線はJR相模線の下溝駅付近だが、少し離れてはいるが、有鹿谷と言われ、式内社・有鹿神社のお水取りの地もある。古事記・日本書紀が編纂されたのは元明・元正天皇時であるが、大山の夏至線は三浦半島の走水から始まっている。奈良にも無いものが相模国・養毛にあるのには驚きである。平安時代にあつても聖観音立像・二王像・密教の文化（五智如来坐像）を伝えている。（秦氏伝承の五大尊像は中尊の不動明王像のみが残されている）

鎌倉期の早期作られたと思う「縁起」は聖武天皇の国分寺創建の話で始まる。また天井の梁には「聖武天皇と行基」の名前が書かれている。残念ながら「良弁師」の名前が無いのは残念である。何故ならば「阿夫利神社開山は良弁」と決まっているからである。そこで今回はこの点に触れて見る事にした。

良弁僧正誕生の記録 伊勢原市・大山寺縁起には「鎌倉・由比の長者に産まれた」と書かれている、しかしながら、秦野市史巻一・「東大寺縁起絵詞」からして良弁の出自が記されている。内容は「相模国大隅（大住）郡漆窪と云所の漆部の氏人也」とあるので秦野市「漆窪」と推定できる、というものである。このNO-4は天平二十年（七四八）二月 漆部伊波が知識物を進上して外従五位下を授かった記録だが、伊波

歴史ある寺を受け継いで

金剛寺住職 鈴木楚道

私は東田原金剛寺住職鈴木楚道と申します。金剛寺は母の生家で、先代義正和尚の外孫として生を受け、南小中学校、秦野高校、日本大学と進み、ファーストリテイリングつまりユニクロに就職し、郡山の店舗で働いたのち退職、静岡市大岩町の臨済寺で三年半過ごし、当寺住職とし十一年目になります。

私が仏の道に入ったのは父の死でした。大学三年の冬に父が末期の胃ガンを患いました。余命三か月の宣告でしたが、五か月半後に亡くなりました。その葬儀の導師を先代和尚が務めました。通夜、告別式、火葬と読経と共に儀式が進んでお骨を拾う時は悲しみのピークだったと思います。その後四十九日、一周忌を迎えその都度多くの親戚、知人が手を合わせお焼香している姿を拝見し、お経を聞いていると父は成仏しているのだと確信できました。その様な仏事を肃々と行う祖父の背中を見たことが仏道を志したきっかけです。

さて、当寺は臨済宗建長寺派で私は



当山開山
退耕行勇和尚の像と位牌

三十四代目になります。歴史については諸説ありますが、実朝公の首が田原に埋葬される以前から当地には小寺があり、実朝公三十三回忌、開山退耕行勇和尚十三回忌の供養を厳修するにあたり波多野氏が再興した、というのが通説となっております。その百三十年後には、江戸下野入道心佛が現在の文京区春日二丁目、寺宝や仏像の大多数を移した。すると当寺は荒れて衰退してしまい、千五百年頃には火災で多くを焼失してしまった、と伝えられております。しかし、実朝公由来の阿弥陀三尊像は田原から持ち出されずに残りました。

その阿弥陀三尊像が昨年八月に秦野市の重要文化財指定を受けました。指定に至った経緯は、秦野市からこの

仏像を文化財の指定に向けて調査をしたいとの連絡から始まりました。令和三年八月十九日、調査に来られたのは神奈川県立金沢文庫の主任学芸員瀬谷貴之氏と市生涯学習課の方でした。調査報告には『両脇侍観音・勢至菩薩立像に髪や衣文の形式から慶派仏師の肥後定慶とも通じるものであり、また光背も鎌倉時代初期に遡る当初の物が残っていることも特筆される。中尊は阿弥陀如来立像だが、両脇侍の作例から推測して本来は坐像だったとみられる。そしてこの中尊は鎌倉時代中後期の形式や様式を良く学び、鎌倉地方を拠点としていた鎌倉仏師などの作品かと思われる。以上を踏まえて指定されることが望まれる』との報告でした。

従来はこの阿弥陀三尊像は実朝公の護持仏で北条政子が持ってきたと伝わっていました。今回の調査で供養仏であると判明しました。

最後に、お寺を預かる身としまして、ますますの寺門興隆と万民和楽を念頭に入れ、秦野市の文化財を大切に保存し、多くの方に安らぎを与えられる場所にしていきたいと思ひます。

「連なり」を想う

今井しようこ

朝、駅に向かう道の途中で丹沢山塊を見上げる。冷え切った今の時期には山並みが凜と感じられる事もあるし、夏は山々がこつちをうかがっているような気配がする。

私の仕事は遺跡の発掘調査事務所での作業員。遺跡についての専門家の下でさまざまな業務をこなす。アルバイトだ。大学を出た途端に四人の子どもに恵まれて、産み育てているうちに、どこかの会社の正社員になるなんて事のない方向に來てしまった。

今日も丹沢に守られた盆地から電車に乗って出発。事務所のある街に向かう。遺跡発掘というのは土の中から掘られた後も先があり、調査報告書という形にまとめられる。私の会社が請け負うのが、開発前提のための遺跡発掘調査なので、扱うのは消えるサダメの遺跡。その記録保存としての意味を持つ重大な仕事だ。時には現場勤務も命じられて土を掘ったり測量したりする業務にあたるのだが、最近は事務所に運び込まれた土器を洗って出土地点の記号を記したり、組み立てて復元し図



筆者 近影 |

面を描いたりする事をしている。この仕事も十二年目。

昔から遺跡だの考古学に興味があつたかというと全然で、絵を描いたり文章を書いたり、妄想癖のある子だった。私が育ったのは、箱根町のテッペン仙石原という場所。そこでは四季折々に、樹々や空やお日様や、霜や雪の結晶が万華鏡のように美しい情景を繰り広げている。そんなモノに見惚れているあつという間に毎日過ぎ……そう、勉強というものがイマイチ遠くに感じられても無理はない。そういう子ども時代だった。

そうしていたある日、ススキ草原のど真ん中にて、夕方の太陽がものすごい輝きで山の尾根に触れて、たちまち空がラベンダー色に染まり、流れてくる雲が時空を超えてやってきていると

感じられた。鳥肌が立ち、今立っている地面は何万年も昔からここにあり、この風景を繰り返しているのだと気づいて震えた。それは私に天啓を与えた。そう思い込んだのだ。少々妄想癖のある、思春期に差し掛かうとしている少女は、それを神様に出会ったという体験をしたと衝撃を受けて、以後自分の進路の事などは全然考えられなくなってしまう。なぜ自分を理系だ文系だと分類して、押し出されるようにこの山を出て次の学校に進まなくてはいけないのか。だって、私にはわかってしまった。今ここに、ずっと繋がってきてそうして自分があるということがそれは何年後かにどの学校に進むかよりも大きな発見で事件。その思いは切実で毎日何ページも日記にしたためていた。

そうした日々の中で、中学校時代の歴史の先生に知的な刺激を受けたのが二宮先生という方だった。かの二宮尊徳の血筋の方で、教職に就く前はどうかの出版社に勤務していたという。脱線する話はもちろん、授業はとびきり面白い。ある時、先生は重そうにプラスチックの衣装箱を抱えてきた。中には金次郎の使っていた本がどっさり入っていた。先生が気軽(側から見ると)

にヒョイトと取り出して触らせてくれたので、クラス中がちよつとびつくりした。時代劇で見たことのある和綴の本で、しっとりした感触でちよつとカビ臭く重たかった。「これ、あの金次郎が触っていたモノ。そして隣にいる先生は金次郎と繋がっている!!」年号の並ぶ歴史の教科書がぶつ飛んで、リアルに重さを感じた事の方が鮮やかに記憶に残っている。

さて、今日のお仕事である。小説家になろうと入った芸術学部で、書きたい事、そのものを見出すことはできず、そうして大学を卒業するや否や子どもを産んで、やっと見つけた遺跡発掘事務所での仕事場で、今や私がヒョイトと土器を持ち上げて、さまざまな作業をしている。部屋中のテーブルの上に土器を広げて接合という作業をする。現場から上がってきた土器を洗って地点の記号を書いて、そして復元を試みる。すくすくつきそうだし、似てるのに全然くっつかなかったり、一日中やってひとつもつかない時は時給をもらってすみませんという気持ちになる。しかし、ひとつの土器片を手にとって、なにげなく無意識に拾った一片とガツチリくみあった時には、びつくりして興奮する。「土器と土器が

呼び合う」と私は確信しているのだが、人に言ったら笑われるかもしれない。でもある日、縄文時代の小さな甕で、上半分と下半分が毛色の違う文様をしていたものが、もとは一つの土器だったと繋がった時、これは素人の私の頭や感覚で成し得ないことだと思った。大きさも形も他とはちよつと違っているその甕を、「ひよつとしたら骨の入っていた骨壺のようなものだったのかな」と呟いたら、そばにいた専門の先生が、「うん、本当にそうだった可能性がある土器だよ」と言った。だけど骨壺だとしたら小さすぎる。赤ちゃんの!? 手の上の土器には細やかに繰り返し返している文様がきちんと並び、丁寧な作業から緊張感が伝わる。立派な土器だ。その中に入っていたかもしれない赤ちゃんの骨。胸のあたりがズシンときた。でも、何千年前の人と共感したと思っているのは私だけ。あるのは縄文後期の小型の甕だけだ。

遺跡発掘調査の仕事というと、幽霊や怨霊とか大丈夫ですか?と聞かれる事があるけれど、遺物は、今私たちが囲まれている物たちと同じ佇まいだ。生きている人の念の方がよっぽど怖い。職場の先生たちは土器を前にして、形式と形式を見分け、文様のパターンを

読み取り使われた道具を判別する。使った人の潜在意識も顕在意識も、誰かの心象印象もない。先生たちの行為は、事実を述べる事に徹する。それが逆に、個人のエゴを消し去って、神様に近づく術みたいで面白い。私の毎日はこんな風で、あの頃ススキ草原の真ん中で出会ったと感じた神様に、何十年も経って再び出会っているのかもしれない。



筆者 近影 II

*編集者補足

今井しようこ氏は令和四年七月入会。令和三年九月「マンガでわかる考古遺跡発掘ワーク・マニュアル」を出版。令和五年二月に「マンガでめぐる考古遺跡・博物館」を出版。二作とも創元社からの発行。今後の今井さんのご活躍を期待したいと思います。

今年も歴史に学び 神話に心

を寄せて

戸口あや子

今年の始まりは日本神話(日本誕生)です。日本人の祖先は、いざなぎ、いざなみのみことから始まり、色々と苦勞しながら時には失敗したり迷ったりしながら国をつくり、暮らしのものとを始められたと謂われています。いざなぎ、いざなみの間には、天照大神、すさのおのみことが生まれ、その子供、また子供と続いて大国主命は生まれました。

大国主命は、大勢の兄様たちと元気に飛び回って大きくなりました。因幡の国には八上姫という愛らしいお姫様がいました。兄様たちは、自分こそ八上姫と結婚しようと考えておりました。ある日、兄様たちは八上姫に会いに行くことになり、大国主命に大きな荷物を持たせました。大国主は、荷物を大きな袋に入れて背負いました。兄たちより、ずっと遅れて海に着きました。そこに毛をむしられたウサギがうずくまっています。兄たちは「海の水を浴びて風に吹かれて寝ておれ、治るぞ」

と笑って行ってしまった。ウサギは、言われたとおりにしましたが、海の水は乾いてくると赤むけの肌がヒリヒリ、ズキン、ズキンと痛み、「痛い、痛い」と泣いていました。

大国主が通りかかり「かわいそうにどうしたのだ」とやさしく聞きました。「はい、わにぎめに毛をむしられました。私がわにぎめにうそをついたからです」。ウサギは海のそばで遊んでいて波にさらわれ、木につかまって沖の島に流れ着き、海の向こうに見える因幡に帰るため、わにぎめの仲間が何匹いるか数えてあげると言って、たくさん

のわにぎめを向こうに見える因幡の浜まで並べ、わにぎめの橋をかけました。ぴよんぴよんとわにぎめの数を数えながら背中を飛び跳ねて因幡の岬に飛び降り、「私、帰りたいくてあなた方をだましたの。でも橋をかけてくれてありがとう」というと、わにぎめたちは「ずるいよ、ぼくたちをばかにするなんて」と寄ってたかってウサギの白い毛をむしり取ってしまいました。

ウサギをかわいそうに思った大国主に教えられたとおり、きれいな泉の水で体を洗い、ガマの花を摘んでそれを敷いて寝ていると、元のきれいな白ウサギに戻りました。このウサギは「い

なばの白うさぎ」と呼ばれています。日本神話の一節です。



西巻一彦氏の彫刻
出雲大社境内

秦野市には、出雲大社相模分祠があります。今年も鳥居前には干支「卯」にちなんだウサギの石像が置かれました。この作品は、病と闘いながら作家、西巻一彦さんが彫ったもので、今年で十体となりました。大国主様がウサギを包み込むように微笑みながら抱きかかえる姿です。十二体まであと二体です。まだまだ彫刻家として頑張ってほしいです。

私も秦野市民のひとりとして彫刻愛し隊員及び日本一おいしい秦野の水の秦野名水名人講のボランティアです。また、笑える川柳などを詠めるように、今年も努力いたしたいと思っております。

土偶と紙芝居

横溝 彰

私は中学生の時、安本利正氏（故人…太岳院元住職・秦野市文化財保護委員）に誘われて遺跡発掘調査の手伝いをした。安本氏の現場での話に興味を持ち、考古学に関心を持つことになり、学校の帰りに畑で鍬（やじり）を拾ったり、実家の畑の脇に散乱していた土器片を収集するようになっていた。六十代後半で仕事を終え、秦野に戻ったのを契機に箱に放置していた縄文の土器片や鍬の整理を始めた。

そうした中で新東名工事現場の発掘調査で、縄文時代の秦野の様子が一層明らかになってきた。特に菩提横手遺跡から出土した大型中空土偶。そして稲荷木遺跡での集落は住居や墓、配石遺構などに多くの石を配置していることが特徴で、これらの大量な石は水無川から運び込まれて集落が形成されたといった報告に驚いたのは私だけではないだろう。

私は紙芝居文化の会の会員として紙芝居を演じるかたわら、この中空土偶に関心が湧き、紙芝居「土偶・空ちゃんどこいくの」を創作した。そこで直



紙芝居「土偶 空ちゃんどこいくの」と丹沢の山並み

面したのは当時の人たちがどのような思いで土偶を作ったのだろう、どんな思いを託したのだろうかということでした。従来、「土偶は女性をかたどったもので自然の豊かな恵みを祈ってつくられた」との見方が一般的であった。

私は昨年、竹倉史人氏（人類学者・『土偶を読む』の著者）の土偶講座の受講機会を得た。その席で、竹倉先生は従来の考古学者の見解から一歩進んで「土偶は植物や動物の精霊像である」との見解を示された。先生に中空土偶の写真と私の紙芝居を見て頂くと、この土偶はイノシシの精霊像との示唆を頂いた。その際、出土地が丹沢山ろくで今もイノシシが出没することを告げた。私が「空ちゃん」と呼んだ中空土偶の表情はイノシシに似ていて合点がいつ

た。縄文時代の後期には集落の定住化が始まり、集落の周辺に落とし穴を作り、シカやイノシシを捕獲した。当時、木の実はもとより動物も大切な食料であり、定期的にイノシシが捕獲できることを祈っていたと考えていい。また、集落のくらしでは、食料の収穫・保存等に工夫がなされた。特に堅果類（どんぐり・栗・胡桃・トチの実）には、生（なり）年（とし）があり、豊作のときは土器に保存したり、集落の周りに種を蒔いたりして食料の確保に努め、水や周りの生き物を大事にして仲良く暮らしていた。そうした暮らしが続くことを願って精霊像として土偶は作られたと考えている。

＊「生り年（マステイニング）…樹木の種子や実の結実状況が広範囲に同調、数年おきに豊作となること。捕食者が食べきれないほど豊作にすることで、種子の生存率を高めたり、あるいは受粉効率を高めたりする効果があるとされる。」＊

なかでも「遮光器土偶はサトイモの精霊像である」とする竹倉先生の解釈は大変わかりやすい。遮光器土偶は坪井正五郎博士が明治二十年に発見された土偶の大きな眼を見て、北方民族が着用する遮光器から名付けたとされて

いる。

秦野の農家では里芋は収穫が済むと早く食べる分は藁などにくるみ物置においておくが、大半の里芋は深い穴に埋め、必要に応じて穴から取り出していた。里芋のなかでも良いものは来年の種芋用として、何重もの寒さ対策をして穴に保存していた。

ところで遮光器土偶の出土地はほぼ東北地方に限られている。(代表的なのは重要文化財に指定の青森県の亀ヶ岡遺跡と宮城県の恵比須田遺跡出土の土偶)

竹倉先生は遮光器土偶の形状をつぶさに見て土偶の各部位でサトイモの形状を表しているとした。特徴のある眼は親芋から子芋を取り外すと遮光器そつくりの跡ができる。そして子芋と孫芋を四肢にみたてることができるとした。当時、集落ではサトイモの栽培が行われ、種芋は穴を掘り寒さから守って保存されていた。そこでサトイモの精霊像としての土偶を作り、サトイモと一緒に穴に埋めていたと考えた。この土偶は縄文時代の後期に出現し、晩期の終わりに突然姿を消した。その間500年とされている。これは列島の寒冷化が東北地方を襲い、土偶の祈りも空しくサトイモの栽培が全滅した

ことを暗示している。

私はこの経緯を土偶紙芝居の二作目として「土偶・メガちゃんのしごと」をてがけた。農家の二男として里芋作りを手伝っていた背景もあり、ふるさとの里芋にまつわる「ひよつくりいも」等のほっこりとした思いを紙芝居を通して伝えたいと考えていた。そこで、「土偶のメガちゃん」に思いを託して紙芝居を創作した。

最後になりますが、秦野は今までの縄文遺跡に加え、新東名の工事現場で確認された新たな縄文遺跡を勘案すると長野や山梨に劣らぬ縄文の文化が花開いていた街であったと言える。特に、室川周辺の湧水地は大半が縄文時代の遺跡が確認されたところでもあり、現在も縄文時代の食料であった胡桃、どんぐりそして栗などの自生が見られる。こうした経緯を踏まえ、『縄文人もおいしい秦野の水を飲んでいた』として紙芝居を通して新たな秦野の魅力を発信していきたい。

★新入会員です よろしく

金子 祥之	南地区
譚広院	東地区
鈴木 楚道	東地区
廣越 功久	南地区

◆総会・講演会のお知らせ◆

総会

令和五年四月二十二日(土)

午後一時～

場所 秦野市立本町公民館

(総会終了後)

演舞 秦野ささら踊り保存会(県指定無形民俗文化財)

講演会

演題 「柳川村与兵衛と漆あきない

―秦野地域と漆―

講師 桐生海正先生

県立足柄高校教諭

★主な出来事

令和四年七月二十二日

香雲寺に縁台二脚を寄贈

令和四年八月四日

極楽寺に縁台二脚を寄贈

令和四年八月二十六日

秦野ささら踊り保存会に寄付

令和四年十月二十日

会員対象学習会「仏像の見方」を

開催 講師 理事長 小泉 孝

事務局

秦野市菩提三二〇―三

竹田 民雄 宅

電話 〇四六三―七五―二五三一